

高等学校教育課程研究集会 参考資料

平成17年8月 岐阜県教育委員会

国 語

1 国語科の目標とねらい

Q 新学習指導要領では国語の目標はどのように示されているか。

国語科の目標は次のとおりである。

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

従前の目標と比較すると、「理解」と「表現」の順序が入れ替わり、表現力の育成を重視する姿勢がうかがえる。また、新しく「伝え合う力を高める」が加わり、言語による相互伝達や相互理解の能力を高めることが求められている。

「伝え合う力」とは、互いの立場や考えを尊重しながら言語を通して適切に表現したり理解したりする力のことであり、急速に変化していくこれからの社会の中で、異なる考えや立場にある人々の間で理解し合い伝え合うことができるよう、是非とも身に付けさせなければならない力である。

また、平成10年7月に示された教育課程審議会の答申では、自ら学び自ら考えるなど、生徒の「生きる力」を育成するという改訂の趣旨を踏まえ、おおむね次の点が改善の基本方針として示されている。

- ・言語の教育としての立場を一層重視する。
- ・互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置く。
- ・自分の考えをもち論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する。
- ・領域構成を「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」及び言語事項の3領域1事項とする。
- ・指導の充実を図る観点から、言語活動例を示す。
- ・各領域の指導時間数の目安を示す。

つまり、国語科の学習指導は、言葉による表現や理解の基本的な能力を身に付けさせ、その上にとって言葉で伝え合う力を高めること、そして、自ら学び、自ら調べ、考え、話し合い、問題を解決していく能力を育てていくことを目指しているのである。

2 国語科における改善の内容

Q 高等学校国語科における改善の要点は何か。

今回の改訂で重要なのは、ややもすれば知識中心・教師主導型の指導に偏りがちであった高等学校国語科の授業から、生徒が主体的に言語活動を行い言語能力を伸ばす学習を展開する授業へと指導を改善するところにある。

そこで、科目構成として、適切に表現する能力、伝え合う力を高めるために国語表現に関する2つの科目を設け、「国語表現Ⅰ」は選択必修科目とした。

また、実践的な指導の充実を図ることを目的

に、各科目ごとに具体的な言語活動例が示された。内容を大別すると次のような言語活動である。

- ・課題に応じて必要な情報を収集し、その成果を基に報告や発表などを行う言語活動
- ・文章の理解を深め考えを広めるために、関連ある文章を読んだり読み比べる言語活動
- ・題材を選んで考えをまとめ、発表、討論したり意見を書いたりする言語活動
- ・文章を読んで感じたことや考えたことを文章にまとめたり話し合ったりする言語活動
- ・相手や目的に応じて話をしたり文章を書いたりする言語活動
- ・表現上の特色や効果について考えたり話し合ったりする言語活動
- ・古文や漢文の調子などを味わいながら音読、朗読、暗唱する言語活動

言語活動例には、情報の読みとりや文章の読み比べなど、問題解決学習に役立つような生徒の主体的な読みの学習が示されている。この内容を踏まえると、国語科においては、表現能力の育成を重視するとともに、読むことの指導内容の改善を図ることが重要視されなければならない。

つまり、書き手の立場に立って的確に読み取る能力を養い、その確かな読みの力を基盤として、読み取った内容について自分の考えをもち、話し合ったり意見を書いたりする言語活動学習の指導が期待されているのである。

3 授業改善の方向

Q 高等学校国語科における授業改善の方向はどのようなものか。

国語科における改善の内容は、次のような方向に授業改善を図る必要を示している。

(1) 生徒の主体的な言語活動が行われる授業を展開する。

生徒が課題意識をもって「話す・聞く」、「書く」、「読む」活動を行うことで、生徒一人一人の言語能力が高まる授業を展開する。

そのためには、教師が解説して進める授業やいわゆる一問一答式の発問による授業展開など、生徒の主体的な言語活動が行われない授業になっていないか、日々の授業を再点検する必要がある。また、「読むこと」の学習指導においては、本文の内容理解を中心とするいわゆる内容中心主義になりがちなので、その授業でどのような言語活動の力を身に付けさせるのかを明確にした授業計画を立てなければならない。

(2) 言語の教育の観点から指導目標及び学習目標を設定する。

言語の教育の観点から指導目標を設定し、授業の中でどのような言語能力を身に付けさせるのかを明確にするとともに、生徒にはどのような言語能力を身に付けるための学習であるのかを具体的に意識化させた上で授業を展開する。

国語科の授業では、従前から言語の教育が行われてきたところであり、1時間の授業の中で生徒は「話す・聞く」、「書く」、「読む」活動を行ってきたはずである。しかし、指導の対象とする言語活動を絞り込まず、生徒のすべての言語活動を総花的にとらえ指導を焦点化しないために、生徒に確かな言語能力が身に付かないで終わってしまうおそれもあった。その点で言語の教育という観点から目標を設定することの重要性を認識する必要があるのである。

(3) 評価規準、評価方法、評価場面を明確に設定する。

目標に照らして、学習者の実現状況を適切に評価し、指導に生かしていくための評価の在り方について研究する。

また、教師による評価とは別に、学習活動と

して生徒に自己評価や相互評価をさせることで、課題意識をもって主体的に学習に取り組ませる態度を養うことができる。

4 指導と評価について

Q 目標に準拠した評価を行う意義は何か。

学習指導における評価について、平成 12 年 12 月の教育課程審議会答申に次のように示されている。

学習の評価は、教育がその目標に照らしてどのように行われ、児童生徒がその目標の実現に向けてどのように変容しているかを明らかにし、また、どのような点でつまずき、それを改善するためにどのように支援していけばよいかを明らかにしようとする、いわば教育改善の方法とも言うべきもの

この内容はこれまでの評価の位置づけと大きく変わるものではないが、今回の改訂であらためて強調されているのは、次の理由による。

- (1) 教育課程改訂の方針の 1 つに「基礎・基本の確実な定着」があるが、それを実現させるために目標を明確に設定し、それに照らして生徒の実現状況を評価し、その評価に基づいて指導を充実させていくことが求められている。
- (2) 学校が、家庭や地域社会から信頼されるとともに相互の信頼関係を築くために評価に関する説明責任を果たすことが重要である。

高等学校においては、従来から実施してきた目標に準拠した評価を充実させ、生徒の基礎的・基本的な学力を確実に身に付けさせ、「生きる力」を育むものとしていかなければならない。

Q 適切な評価はどのような手順で行えばよいか。

(1) 教科・科目の目標と観点別評価の設定

各学校において、自校の学力の実態を把握し、学習指導要領に示された教科・科目の目標及び内容と、各学校で設定されている教育目標を踏まえて目標を設定する。

そして、その目標の実現状況を評価するために目標に準拠した評価を行う。目標は多面的な側面をもち、どの側面からとらえるかによって評価は異なったものになるので、評価の観点を明確にして具体的な評価活動に入る必要がある。国語科の評価の観点は、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の 3 領域の能力と「関心・意欲・態度」、「知識・理解」の 5 つの観点で構成する。

<評価の観点と趣旨>

観点	趣 旨
関心 意欲 態度	国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりするとともに、伝え合おうとする。
話す 聞く 能力	自分の考えをまとめたり深めたりして、目的や場面に応じ、筋道を立てて話したり的確に聞き取ったりする。
書く 能力	自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じ、筋道を立てて適切に文章に書く。
読む 能力	自分の考えを深めたり発展させたりしながら、目的に応じて様々な文章を的確に読み取ったり読書に親しんだりする。
知識 理解	表現と理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付ける。

(2) 指導と評価の年間計画の作成

- ・ 1 つの単元で指導の対象とする領域は 1 領域に絞り、1 年間を見通して単元構成に沿った指導領域の効果的な配分を行う。

- ・「国語総合」は、「話すこと・聞くこと」と「書くこと」の配当時間数の目安が示され、「話すこと・聞くこと」を主とする指導には15単位時間程度、「書くこと」を主とする指導には30単位時間程度を配当するものとしているので、それに基づいて計画を作成することにも留意しなければならない。

(3) 単元における目標と評価規準の設定

- ・各単元においては、1単元1領域の指導を基本とする。他の領域とも関連させた学習を展開することは大切であるが、指導の対象とする領域は1つに絞る。
- ・教科・科目の目標を踏まえて、単元の目標を設定する。単元の目標は、「指導の対象とする領域の力」と「関心・意欲・態度」と「知識・理解」の3観点について設定する。
- ・目標に即して、その実現状況を客観的に判断するための拠り所として評価規準を設定する。評価規準が示す学習状況は、目標に照らして「おおむね満足できると判断される」状況であり、具体的な生徒の姿として設定することが肝要である。

(4) 各時間の指導と評価

- ・各時間における評価は、生徒一人一人について、評価規準に基づいて行う。評価規準が示す状況を実現していれば「おおむね満足できると判断される」状況（B）であり、実現していなければ、「努力を要すると判断される」状況（C）であると評価する。
- ・さらに、「おおむね満足できると判断される」状況（B）について、質的な高まりや深まりをもっていると判断されるとき、「十分満足できると判断される」状況（A）という評価になる。
- ・今回の教育課程改訂の方針である「基礎・基本の確実な定着を図る」ことを踏まえると、評価は、行ったらそれで終わりというもので

あつてはならない。特に「努力を要すると判断される」状況（C）と評価した生徒に対する手だてが具体的に講じられなければならない。そのためには、「努力を要すると判断される」具体的な状況を予め想定し、授業の中で適切な助言が行えるよう準備しておく必要がある。

- ・各時間における評価は、学習目標に照らして、3つの観点（「指導の対象とする1つの領域の力」と「関心・意欲・態度」と「知識・理解」）のうち対象となる観点から行う。
- ・各時間の学習指導を行うときには、目標の実現状況を効果的に評価するための評価方法を検討し、各時間の学習指導の中で効果的に評価できる場面を具体的に設定しておかなければならない。
- ・観点別に実施した評価は、単元ごとに総括しておくことが望ましい。

(5) 評価から評定への総括方法の確立

- ・単元ごとに実施した評価を評定に総括する方法を確立しておかなければならない。
- ・従前の「知識・理解」に偏りがちであった評価から観点別の評価へと転換した以上、定期考査や小テストを中心とした評定ではなく、評価規準に基づいて授業で実施した評価を評定に総括する方法を定める必要がある。
- ・評価内容と評価方法については、生徒や保護者に明示できる状態を確立しておかなければならない。

Q 指導と評価の一体化とはどのような考え方か。

「指導と評価の一体化」について、平成12年12月に示された教育課程審議会答申には

指導と評価とは別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指

指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である。

と述べられている。これは、目標に準拠した評価により基礎・基本の確実な定着を意図した指導においては、重要な点である。

生徒を数量的に評価したり相対的に評価するのは違い、生徒一人一人に基礎・基本を確実

に身に付けさせることができたかどうかを見とどけることが大切であり、評価により基礎・基本の定着度を測り、その結果に応じて授業の中で指導内容や方法を変更し、生徒一人一人に対して指導・助言を行ったり、次時以降の学習指導の在り方を検討することが求められるのである。

< 単元ごとの指導と評価の計画例 現代文 >

- 1 科目名 現代文
 2 単元名 詩歌「詩を書く」『I was born』 (全3時間)
 3 単元の概要

生徒の実態	一読、あるいは数回繰り返し読みすることにより、おおよその内容を把握する力はあるが、詩の中で描かれている世界、登場人物について表層的に読み取ることによって理解できたと感じてしまう生徒が多い。自分や自分の周囲に置き換えて、自分自身の問題として引きつけることによって、問題意識をもたせ、読み取る力を高めていくことを目標とする。
単元の目標	ア 登場人物の考え方や心情を表現に即して読み味わい、話し合いによって自分の考えを深める。 (関心・意欲・態度) イ 詩全体の構成を的確にとらえるとともに、描かれた人物・情景・心情を表現に即して読み取る。 (読む能力) < 現代文 内容イ > ウ 詩の主題について考え、作者が伝えようとしたことについて自分の考えを深める。 (読む能力) < 現代文 内容ウ > エ 散文詩の形式について理解すると同時に、語彙を豊かにし表現の工夫について理解する。 (知識・理解)

4 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
①表現に即して、登場人物の人間像や心情を読み味わおうとしている。 ②他の生徒との読みの交流を通して、自分の読みを深めようとしている。	①『I was born』の構成を的確に読み取っている。 ②『I was born』の情景や、主人公など登場人物の人物像や心理を、それぞれの場面の表現に即して読み味わっている。 ③『I was born』の主題について、他の生徒との意見交流などを手がかりに、自分の考えを深めている。	①詩の形式や効果的な表現の工夫について理解している。 ②詩中の語句の意味を理解し、語彙を豊かにしている。

5 指導と評価の計画

時間	各時間の目標	主な学習活動	各時間の具体的評価規準	評価方法
1	・詩『I was born』を興味をもって読む。 ・散文詩の形式を知る。 ・詩中の語句の意味を理解し、語彙を豊かにする。 ・『I was born』という題名について考える。	・教師の範読を聞いた後、『I was born』を各自で朗読する。 ・散文詩形式の他の作品を読む。 ・難解語句の意味を確認する。 ・この詩の題名が果たしている役割について考えながら読む。	ア 散文詩の形式を理解している。【知①】 イ 難解語句の適切な意味を理解している。【知②】 ウ 『I was born』という題名が果たしている役割について自分の意見をもとうとしている。【関①】	・観察(机間指導・発表) (ア、イ、ウ)
2	・『I was born』の全体の構成をつかむ。 ・第5連、第6連を読み取る。	・詩的世界の状況設定を登場人物・時間に即して読み取り、全体の構成を把握する。 ・第5連で、「僕」が「生命の誕生」をどのようなきっかけで発見したのかを、「僕」の心理の推移に着目して読む。 ・第6連で、「蜉蝣」のイメージについて考えながら読む。 (次時まで、「自分誕生のエピソード」を取材することを課題とする。取材形式はプリント配布。)	ア 「僕」の回想する世界の中で、さらに「父」が回想するという、時間を逆にたどる展開・構成をとらえている。【読①】 イ 「僕」が「生命の誕生」を発見したきっかけをとらえている。【読②】 「僕」の発見が実は「生」の本質にかかわる深い意味をもつということを「僕」が理解していないことをとらえている。【読②】 ウ 「蜉蝣」のイメージをとらえている。【読②】 そのイメージを「はかなさ」に結びつけてとらえている。【読②】	・観察(机間指導・発表) (ア、イ、ウ)
3	・第6連の「父」の心情を読み取る。 ・第7連の「僕」の心情を表現に即して把握する。 ・詩の主題を読み取る。	・取材プリントをグループ内(4名1組)で交流・発表する。 ・取材を踏まえて、「蜉蝣」の話をした「父」の心情、「父」の話を聞いた「僕」の心情を読み取る。 ・「父」の思いを「僕」がどこまで受け止めたかを考えながら読む。	ア 他の生徒との交流を積極的に行い、自分の考えを深めようとしている。【関②】 イ 自分の誕生について考えること及び、他の生徒との意見交流を手がかりに、「父」の心情、「僕」の心情を読み深めている。【読③】 ウ 「父」の語りかけが、作者の思いに通じているところまで読み深めている。【読③】	・観察(机間指導・発表) (ア、イ) ・点検(ワークシートの記述) (ウ)

6 学習指導案

本時の位置 本時の学習 目標	3時間目 (全3時間)	ア 他の生徒との交流を積極的に行い、自分の考えを深める。 イ 「自分誕生のエピソード」取材プリントをもとに、「僕」に語りかける「父」の心情及び、「父」の話を聞いた「僕」の心情を読み取る。 ウ 『I was born』の主題を読み取る。	(関心・意欲・態度) (読む能力) (読む能力)
導入 3分	学習内容 □本時の学習目標を確認する。	学習活動 ①本時の目標は、課題であった取材を参考に、第6連の「父」の心情、第7連の「僕」の心情、詩の主題をとらえることを確認し、自分の課題をもつ。	指導上の留意点及び評価 ・事前に机列を4人グループにしておくよう指示しておく。 ・本時の目標について、問題意識を喚起し、学習意欲を高める。 ・ワークシートを配付する。
展 開	□第6、7連について「父」、「僕」の心情を読み取る。	②各自で詩を全文朗読する。 ③「自分誕生のエピソード」取材プリントについてグループで意見交流する。 ④「僕」に「蜉蝣」の話をした「父」の心情、それを聞いた「僕」の心情について、自分の読み取りをワークシートに記述する。 ⑤④についてグループで話し合う。 ⑥グループで話し合った内容を発表する。	・③の意見交流が④に結びつくことを告げ、活発な意見交流を促す。 ・取材により自分自身の出生について考えたことを、本文の表現に即して詩中の親子に当てはまらないかと助言する。 目標アに対する評価規準と評価方法 [規準] 他の生徒との交流を積極的に行い、自分の考えを深めようとしている。 [方法] 観察(机間指導、発表)
	□詩の主題を読み取る。	⑦話し合いを踏まえて「父」の心情について読み深め、作者が「父」のことばを通じてこの詩で言いたかったことについて読み取り、ワークシートに記述する。	・前時の学習内容の「蜉蝣のイメージ」を参考にしよう助言する。 ・「父」の話は、生が受身であるという「僕」の文法上の単純な発見に対してされているということを再確認させる。 ・「僕」の心の中で「蜉蝣」と「母」のイメージが重なり合っていることを助言する。 目標イに対する評価規準と評価方法 [規準] 取材結果をもとに、詩中の表現に即して「父」、「僕」の心情を読み取っている。 [方法] 観察(机間指導、発表)、点検(ワークシートの記述) [状況Cの生徒への手だて] ・学習内容を振り返らせ、「父」が「蜉蝣」の話を「僕」にすることによって、「僕」が「生」の寂しさや切なさ気付いたことを再確認させる。 ・その上で、「父」が「僕」に伝えたかったことは、「僕」が気付いたことの先にあるのではないかと助言する。 目標ウに対する評価規準と評価方法 [規準] 「父」の言葉の中には、「生」を受身であるにとらえた少年に対して、その「生」を受け入れて、自らの人生を歩み出してほしいという思いが込められていることを読み取っている。 [方法] 観察(机間指導)、点検(ワークシートの記述) [状況Cの生徒への手だて] ・本文に即して読み取れなければ、参考資料「父」(『消息』所収)を配布する。
まとめ 3分	□本時の学習のまとめをする。	⑧本時の学習内容である登場人物の心情理解を深めたこと、そこから作者が伝えたかったこと(詩の主題)まで読み深めたことを整理し、目標の実現状況を確認する。	・詩的世界が自分に置き換えられ、自分の問題として登場人物の心情が理解できていれば、本時の目標はおおむね達成できたと考える。